愛知県埋蔵文化財センター
研究紀要　第 17 号
2016.5
31-38p

尾張平野における縄文文化より弥生文化への移行過程

永井宏幸

本稿は、壺形土器の組成比率から農耕文化の成立をかんがえる。縄文から弥生への移行過程をかんがえるとき、大型壺の成立が大きく関与していることは従来から指摘されている。しかしながら、大型壺を含め壺が土器組成全体のなかでどのくらいの比率であるか、あるいは壺の比率がどう変遷するのか、その移行過程を各地域で論ずることは少なかった。本稿では、尾張平野の４つ遺跡（山中遺跡・三ツ井遺跡・月縄手遺跡・朝日遺跡）をとりあげる。あわせて、これら４つの遺跡を検討する中で派生する問題点について指摘した。

はじめに

本稿は、愛知県埋蔵文化財センターの既報告資料を中心に再検討する。対象とする遺跡は、一宮市山中遺跡、三ツ井遺跡、名古屋市月縄手遺跡、清須市ほか朝日遺跡の４遺跡で、弥生時代前期を中心とする時期から器種構成および壺の比率を主導し、移行過程をかんがえる。

これら４遺跡を検討した結果、改めて気づいたことがあった。各遺跡を検討していく中でとりあげていく。まずは各遺跡の所見をとりあげる。そして検討結果を踏まえて数値データをもとに器種構成上の壺の比率を提示する。

各遺跡の検討

（1）山中遺跡

山中遺跡の前期資料は突帯文系土器の終末期と遠賀川系土器の終末期の２時期がある。ここでは突帯文系土器の終末期を中心に検討をすすめる。溝 SD01 下層および包含層から突帯文系土器がまとまって出土している。報告によると、SD01 下層は墓域を形成していた土器棺の破片が多く認められるという。つまり、突帯文系土器終末期の墓域を弥生前期後葉の集落造成時に整地したとかんがえられている。ただし、突帯文系土器終末期と弥生前期の遺構、そして中期の遺構も遺跡の基本層序Ⅱ層（暗褐色シルト）により削平されていることに留意しておかなければならない。

SD01 下層資料は、従来から突帯文土器の終末期に相当する資料として提示される（永井 1993 など）一方で樫王式新段階まで下る案もある（山田 2010）。

私は山中遺跡 SD01 下層資料の編年的位置づけについて何度か修正を加えながら突帯紋系土器の終末を検討してきた。当初は、山中遺跡 SD01 下層資料と松河戸遺跡 SD120 下層資料を基準に、器面全面の貝殻条痕を基本とする壺と深鉢の組合せをもって条痕文系土器の出現とかんがえた（永井 1993）。その後、馬見塚式を検討したとき、伊勢あるいは琵琶湖周辺へ議論を展開した（永井 2008）。その理由は近年の出土事例が尾張地域より西方へ傾倒していることからである。そもそも馬見塚式の標徴とされる突帯上に貝殻背面押捺を施す深鉢「増子１類 a（増子 1965）」の分布は尾張地域の周縁部に多い。ちなみに尾張地域の状況を直視しなかった点については、のちに増子康眞から指摘があった（増子 2009）。

山中遺跡 SD01 下層資料の編年的位置づけについて、馬見塚式終末期（永井 2008）は樫王式・貝殻山貝塚南地点式（貝殻山南式）の古段階併行と改めたい。時期を下げる理由は、天保型変容壺の最末タイプである多条の素文突帯がめぐる変容壺の位置付けを新しい要素とし、大口町西浦遺跡を馬見塚式終末期（貝殻山南式併

行）の枠組みのなかでかんがえたいからである。これに対して樫王式より古い時期として切り離したかった細密条痕の深鉢などは、山中遺跡 SD01 下層資料に併行して捉えることによって、当地域の遠賀川式土器の出現期とその後展開する前期の遺跡が一宮市域に集中することも理解しやすくなる。この理解は、三ツ井型深鉢の成立とも深く関与する。それは、浮線紋系土器の要素が遠賀川系土器と折衷し成立した三ツ井型深鉢は三ツ井遺跡、元屋敷遺跡のなかで最も多く、かつ器種構成の主軸であることからも明白である。つまり、紅村弘がかつて元屋敷遺跡で見出した紅村弘第４類の「削痕深鉢（紅村 2014）」の発源地を追認することになった。

（２）三ツ井遺跡

三ツ井遺跡は削痕系土器と呼ばれていた深鉢（甕）形の土器が、浮線紋系土器である氷式の深鉢を祖形として尾張平野に成立した土器を指摘した遺跡である（田中ほか 1999）。月縄手遺跡の削痕系土器を検討した時は、晩期系深鉢と遠賀川系甕が折衷して成立したとかんがえていた（永井 1996）。紅村はこの系列を４類とし、遠賀川系壺と削痕系土器のセットで当初「元屋敷式」を設定した（紅村 1963）が、その後「削痕遠賀川式」と改名した（紅村ほか 1981）。

口縁外面（A 類）または端部（B 類）に連続押圧を加える独自の施文について、氷式に代表される浮線紋系土器の要素を取り入れた深鉢形土器を氷式系削痕深鉢と呼び（田中ほか 1999）、さらに三ツ井遺跡から派生したとかんがえ、三ツ井型深鉢と呼び変えた。その後、類例は増加せず、わずかに朝日遺跡などから出土している程度である。一方、月縄手遺跡からも多く出土する C 類は濃尾平野に広く分布する。

三ツ井遺跡の実見によって再認識したことをつぎにあげる。まず、三ツ井型深鉢は一部に器壁が薄く判別できないもの含むが、観察可能な個体はすべて内傾接合であった。一方、遠賀川系土器の壺・鉢などは外傾接合であった。もうひとつ、遠賀川系土器の胎土に血色のように濃い赤色の発色をする粒子（シャモットと呼んだ）が目立つ個体が 10 点ほどあった。三ツ井型深鉢は砂粒子を多く含む灰褐色系の胎土で一致している。肉眼観察の判断から、少なくとも３種類の胎土で作り分けていると考えられる。

（３）月縄手遺跡

月縄手遺跡は遠賀川系土器を主体とする遺跡である一方で、三ツ井型深鉢 C 類が一定量出土する。紅村の削痕遠賀川式に近い土器組成である。

月縄手遺跡の三ツ井型深鉢は浮線紋系土器の要素がなくなり、三ツ井遺跡より一段階新しい。器高推定 50cm 超の大型壺が３個体図示されている。報告書９（SX01）は頸部片であるが、金剛坂式の出現期の壺である。報告書45(SK18)は胴部から底部片で、内面を丁寧に横ミガキ調整する遠賀川系土器の壺であるが、胴部最大径の位置が胴部上位にあり、条痕文系土器の壺器形に近い。報告書 77（SK23）は胴部から底部片で、下向双渦文の付く遠賀川系壺。いずれも口縁部を欠くため数値データから埋もれてしまうため、特筆しておく。

（４）月縄手遺跡 II

報告書の図を縦覧すると広域型の遠賀川系土器は外傾接合が一般的であるのに、内傾接合が多いことに改めて気づいた（報告書 13 含め 18 点）。もし外傾接合ではないとすれば、在来系統で作られた一群で括るべきである。掲載資料のうち、主に断面表記されている土器を対象に、断面観察が可能な土器について検討した。私が内外面の . 痕や輪積み痕を主眼に観察した結果、広域型遠賀川系土器についてはすべて外傾接合であった。

豆谷和之の指摘した「指づくね突帯」の系譜をもつ報告書 8・19・33 の壺は、ヘラ状工具を用いて突起部を削り出して突起を作り、指で整形する。後出の手法と考えられる。

報告書 68 は細密条痕調整の壺（永井 2011）。紅村はこの壺を指標に細密条痕式を設定する。細密条痕式は山中遺跡や西浦遺跡にさかのぼる（紅村 2014）。

（５）朝日遺跡VI

『朝日遺跡VI』は前期資料がまとまって出土した地点の報告である。貝殻山貝塚の南側に位置する調査区（貝殻山貝塚南地点：以下、貝殻山南と略称する）から、環濠や土坑など朝日遺跡のなかでもっとも古い遺構群が確認された。

『貝殻山貝塚』の第４地点資料群は、「貝殻山

式」の基準資料として取り上げられてきた。ところが、前期から中期の土器群から抽出した資料であったため、型式設定としては不安定な資料群であった(服部ほか 1992 など)。ところが、『朝日遺跡Ⅵ』の報告に提示した SB07 はじめ土坑資料は、貝殻山式の単純資料として注目された。

貝殻山式の名称は尾張地域の前期前半の型式名として通有している。紅村はこれらの資料傍証に貝殻山式を「貝殻山第 4 地点貝層下層の型式（略称・4 下式)」と称し、「尾張平野の前期の最古段階と認定」した (紅村 2014)。私は『朝日遺跡Ⅵ』の調査地点のうち、環濠 SD101 の南側に展開する環濠掘削以前の SB07 を基準とする遺構群を概ね西志賀式以前の時期と考え、貝殻山貝塚の南地点を「貝殻山南式」と呼んでいる。

私は『朝日遺跡Ⅵ』のなかで朝日遺跡の遺構単位の組列を示した（宮腰ほか 2000)。一覧表（報告書 592 頁の表 5）として尾張平野・名古屋台地のⅠ期（前期）を 4 期区分 8 段階に細分し提示した。馬見塚式を含めると 10 段階に細分した。ここで、4 時期区分 8 段階設定した編年に型式名を併称しておこう。

山中遺跡のなかで示したように、馬見塚式の終末期を貝殻山南式前半に併行してかんがえたい。表の突帯文Ⅱ -2 ～Ⅰ -1 までに相当する。貝殻山南式後半は月縄手式とくくりたいが、ここではⅠ -2 に相当させる。条痕文系土器の樫王式はⅠ -2 古まで、Ⅰ -2 新は水神平式古段階と金剛坂式古段階が併行する。西志賀式はⅠ -3 ～Ⅰ -4 までに相当する。従来の認識ではⅠ -2 新段階から西志賀式とするべきかもしれない。

以上のように、馬見塚式終末期が貝殻山南式の前半と接し、貝殻山南式の後半に水神平式古段階と金剛坂式古段階が接点をもつとかんがえたい。そして、西志賀式終末段階（Ⅰ -4 新）は朝日式の最古段階(Ⅱ -1) と接点をもつ。各々の型式が一部重複しながら接点をもつのは、それぞれのまとまりを考慮すれば当然であろう。個々の型式名の内容については稿を改めて示したい。

（紅村 2014）の指摘のなかで、「貝殻山・新資料館南地点の第 2 類」類似例とされた甕（報告書 41・42・43）の「報告には焼成色調の記載は無い」と指摘をされたので報告者として補足しておく。色調はいずれも赤褐色ではなかった。いずれも平行沈線（半截竹管）による施文の甕で、金剛坂式甕の特徴をもつが、紅村の指摘するように「口縁断面は異なる」。つまり、断面形が紡錘形に似て肥厚し、口縁端部が尖った形態、加えて口縁端部上位に左斜めの刻み目（鈴木 1990）を入れるといった特徴を備えていない。

赤褐色の胎土が金剛坂式ではない、つまり貝殻山南式に含まれるかを点検した。赤彩塗布のものを除き、赤褐色＋雲母を含む胎土の土器は壺 4 点（31・49・70・88)、甕 2 点（36・75）が抽出できた。これらすべて中南勢産の土器かは不明であるが、金剛坂式の前型式の設定も想定すべきであろうか。

『朝日遺跡Ⅵ』のなかでもうひとつ触れておきたいことがある。（紅村 2014）と（中村 2015）で引き合いに出された報告書 77 頁図 25 の 300 の出土遺構 96SD101（以下 96 は省略）である。私の所見をさきに示すと、報告書に記述したとおり、300 の出土した SD101 3 層の上位層である 2 層は前期から中期前葉の土器が混在している。溝資料の性格から、300 の 1 点を紅村のいうように「条痕＋波文の壺」と〔「2、」型深鉢〕の組成出現にて「此れが事実」と納得」とは割り切れないのが正直なところである。報告書 6 ～ 11 頁で示しているように、溝の断面観察（報告書 10 頁 , 図 5 : 本稿図 2）からすると 2 層は 3 層の堆積を切り込んで再掘削している。調査区内だけみても長さ 70m を超える溝である。5 m メッシュで取り上げた（報告書 11 頁 , 表 2）出土遺物の時期では、たしかに 3 層は一部のグリット以外すべて前期の資料としてしめしているが、厳密な層位別の取り上げをしたとは断言できない。2 層底面の掘削時期は 3 層底面の掘削時期とさほど間なく想定できる。理由として SD101 の南側約 15m 離れて並走する SD102 は中期前葉、SD101 2 層は中期前葉を含むので、SD101 → SD102 への拡張と推定できる。この拡張は前期末から中期前葉の比較的短期間であり、SD101 2 層の堆積と SD102 下層の堆積はほぼ同一時期あるいは

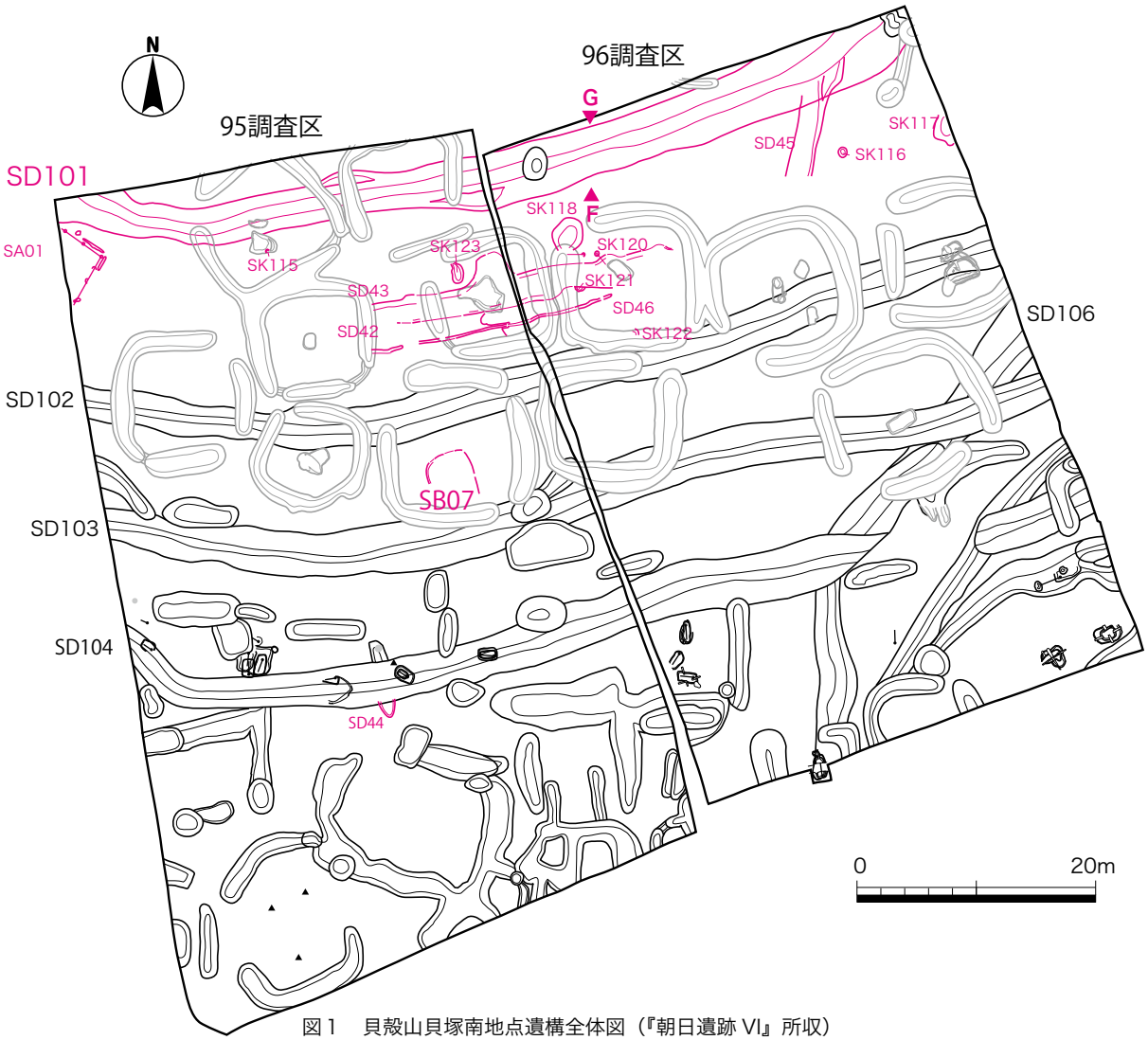
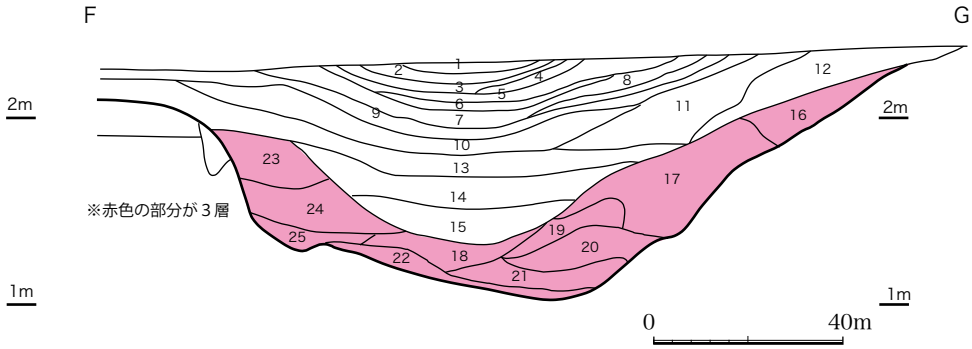


図１　貝殻山貝塚南地点遺構全体図（『朝日遺跡 VI』所収）



1: 暗灰褐色砂（茶色強い、粘質強い）
2: 1+橙褐色砂（粗い）わずかに含む
3: 橙褐色砂（粗い）
4: 3+1撹乱状
5: 橙褐色砂（粗い、やや黄色）
6: 灰白色砂（粗い）
7: 6+1やや互層
8: 灰白色（粗い）粘質強い
9: 灰白色（粗い）やや粘質
10: 黒色砂質シルト
11: 10やや茶色、鉄分の沈着
12: 11+橙褐色砂（粗い）
13: 10
14: 10やや灰色、粘質強い
15: 14炭化物含む
16: 灰黒色砂質シルト+炭化物+橙褐色砂（粗い）
17: 灰黒色砂質シルト+炭化物
18: 15+黄褐色砂わずかに互層
19: 17+黄褐色砂撹乱状
20: 18
21: 18
22: 黄褐色+黒色砂ブロック
23: 黒色砂質シルト（やや灰色）
24: 23 灰色強い+炭化物
25: 18

図２　96SD101 土層断面図

SD101 2層→SD102下層の可能性が高い。つまりSD101 2層は前期のあいだに再掘削された可能性も指摘できる。2層最下位が比較的短期間の堆積とはいっても、前期末と中期前葉の漸移的堆積、つまり紅村いう「西志賀前期貝塚の西側に斜めに堆積する黒色土層」と近似する時期の堆積層とも言える（紅村 2014）。

器種構成と壺の比率

壺形土器の比率を提示するには、統計を取り器種構成から示す必要がある。統計は時間軸を設定し、各時期の標本となる遺構・遺跡から提示するとわかりやすい。ここでは、さきに検討した4遺跡を7つに分けて時期の古い順にあげていく。今回は数量を算出するにあたり、口縁部を抽出した。したがって、個数は口縁部から算出したものであり、胴部や底部を含めて個体数を推定しているわけではない。ただし、重量については出土総量を把握するために計測、総重量として提示した（表1）。

（1）山中遺跡下層（馬見塚式終末期）

山中遺跡下層はおもにSD01下層、SK01・02・03として報告された資料に包含層資料を加えて数量を算出する。

報告書では口縁部とともに胴部資料についても統計表を提示している（報告書75頁第7表）。壺6（条痕2・細条痕4）、深鉢80（条痕21・ケズリ31・細条痕24・突帯文4）、鉢5（ケズリ5）、総重量27.7kg。壺の比率は6.6%。大型壺（深鉢変容壺）が1点含まれている。

（2）朝日遺跡96SB07（貝殻山南式古）

現在、尾張平野で遠賀川系土器が出土する最も古い一括資料である。壺45、甕29、深鉢1、鉢14、壺蓋2、総重量の計測なし。壺の比率は49.5%。このうち、深鉢1と鉢1はケズリ調整の突帯文系土器。

（3）三ツ井遺跡（貝殻山南式古～新）

三ツ井遺跡は96TiSX01、96CbSK153、96ASK02、96TiSB03など貝殻山南式を中心に三ツ井型深鉢が出土する。各遺構の点数が少ないため、包含層資料を含めて示す。壺45、甕16、深鉢64、鉢11、壺蓋6、総重量38.12kg大型壺はなし、細密条痕壺1を含む。壺の比率は31.7%。遠賀川系甕16：三ツ井型深鉢61：条痕文系深鉢2の量比は他の遺跡とくらべて、三ツ井型深鉢が際立って多い。

（4）月縄手遺跡（貝殻山南式新～西志賀式古）

月縄手遺跡はSX01はじめ9遺構から、貝殻山南式新を中心に西志賀式古までの資料が出土している。三ツ井型深鉢C類とした新しい段階にいたる「削痕深鉢・甕（紅村 2014）」が出土している。各遺構の点数が少ないため、包含層資料を含めて示す。壺57、甕60、深鉢33、鉢11、壺蓋23、甕蓋3、総重量62.18kg。壺の比率は30.5%。口縁部資料ではないが、遠賀川系の大型壺が3点ある。

（5）月縄手遺跡Ⅱ（貝殻山南式新～西志賀式古）

月縄手遺跡ⅡはSK116をはじめ21遺構から貝殻山南式新から西志賀式古までの資料が出土している。月縄手遺跡より西志賀式古の資料が相対的に多い。個々の遺構資料の点数が少ないため、包含層資料もあわせて示す。壺70、甕115、深鉢37、鉢13、壺蓋14、甕蓋14、総重量75kg。壺の比率は26.6%。大型壺は口縁部資料2点（遠賀川系土器）、頸から胴部上半が細密条痕壺1点ある。

（6）朝日遺跡96SD101（西志賀式･金剛坂式）

96SD101は西志賀式を中心とする資料であり、3層はほぼ西志賀式におさまる基準資料である。

『朝日遺跡Ⅵ』587～588頁で統計処理の項で示したとおり、ここでは中期以降の資料を除いた1～3層をあわせて表記する。壺331、甕173、深鉢66、鉢145、壺蓋60、甕蓋8、総重量の計測はなし。壺の比率は42.3%。大型壺は図化分として西志賀式2点、金剛坂式2点、胴部資料は西志賀式3点ある。95SD101の図化資料も含めると10点以上ある。

（7）山中遺跡上層（西志賀式新）

山中遺跡上層はおもにSD01を中心に、SK22など10遺構以上が報告されている。いずれも西志賀式新に相当する資料群であり、下層資料とは確実に時期差があり、連続しない。包含層をあわせて示す。壺55、甕58、深鉢25、総重量50.3kg。壺の比率は37.2%。

深鉢のなかには、大地系深鉢変容壺が7点含まれている。大型壺はなし。

（8）小結

尾張地域の前期について、器種構成をあらためて比較、壺の比率を提示することはあまりおこなわれていなかった。どちらかというと、遠賀川系土器と条痕文系土器の比率など系統別に数値化することはあっても、これらを統合して比較することはなかった。

理由は結論が予測できたからだ。今回の数値から山中遺跡下層 6.6％と朝日遺跡 SB0749.5％の壺比率は明確な差がある。この２つは時期差と捉えることもできる。むしろ遠賀川系土器の出現時期にあたるので、遺跡差の可能性もある。本稿は、馬見塚式終末期と貝殻山南式古を併行関係としてみるため、後者の立場を採る。

遠賀川系土器の出現以降、壺の比率が 30 ～ 50％近くまで占め、安定した数量として読み取れる。もうひとつ、朝日遺跡の壺の比率はほかに比べて多い。SB07 は 49.5％、SD101 は 42.3％を占める。朝日遺跡の特徴なのかもしれないので指摘しておく。

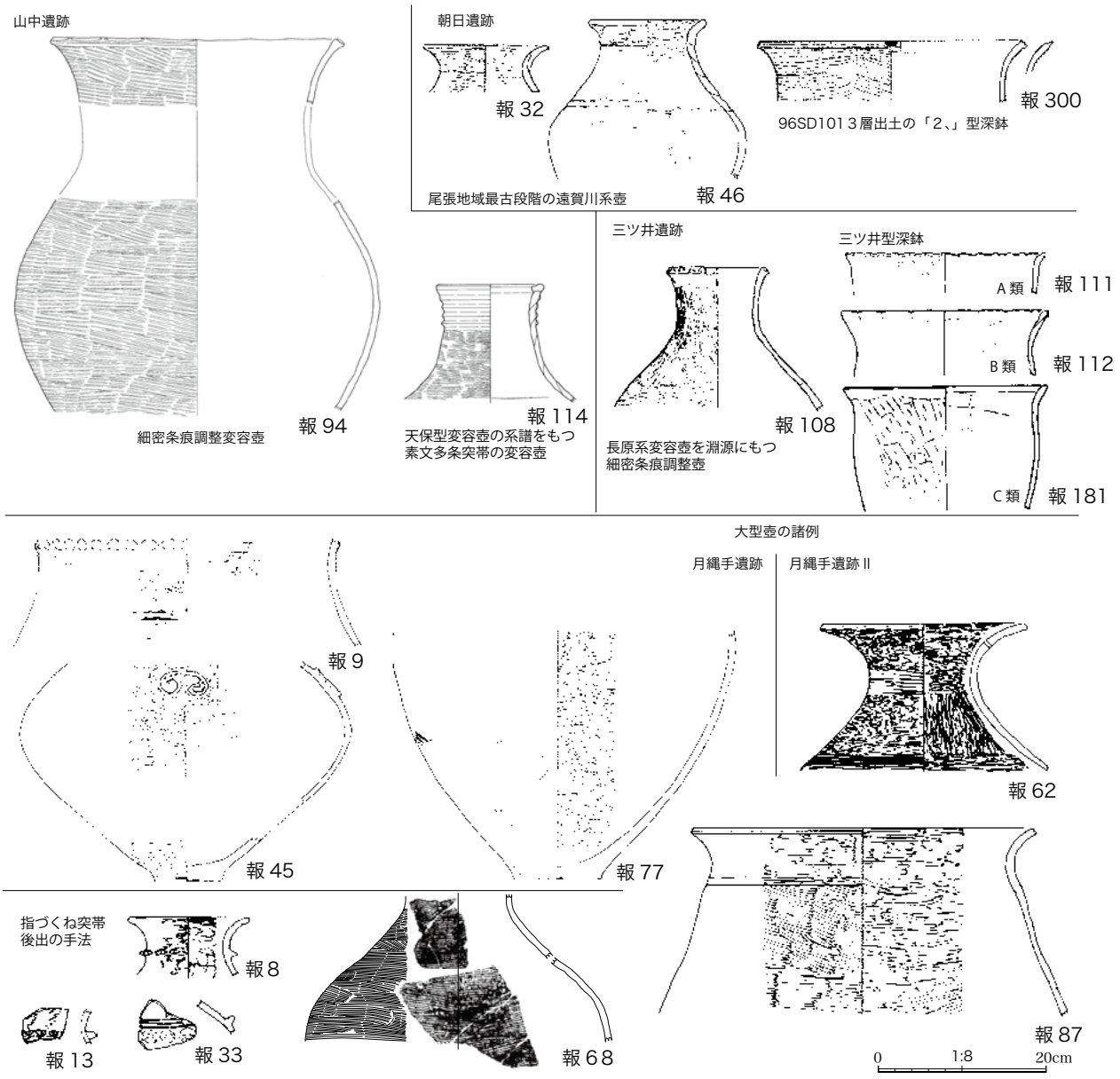


図３　本文中に関連する土器の実測図

まとめ

本稿の主目的は、器種構成上の壺の出現比率を見出すことであった。その準備のため、山中遺跡、三ツ井遺跡、月縄手遺跡は全資料を見直した。さすがに朝日遺跡については、膨大な数のためもう一度点検することはできなかった。そのかわり、『朝日遺跡Ⅵ』（宮腰ほか 2000）の整理中に集計したデータ資料をもう一度見直した。詳細なデータを残してくれた早瀬賢氏（当時静岡大学大学院生）には感謝している。

ともかく、３遺跡についてすべての破片を見直すことになったのは、口縁部破片数を数値化するための作業過程で、報告書掲載資料以外の資料を点検する必要が生じたからである。私にとっては副産物が多かったし、再検討するきっかけとなった。そしてなにより、近年発表された紅村弘、中村友博、両氏の論考に接し、私なりの再検証する機会となった。朝日遺跡 96SD101 ３層出土の条痕文系土器は、両氏の熱いまなざしが向けられ、１片の土器を掲載する重さを改めて感じた。

本稿の結語はいたって単純かつ明確となった。組成グラフ（表１）をみれば一目瞭然である。それは、遠賀川系土器の組成する器種構成から壺形土器が急激に増加する。遠賀川系の壺が参入することで器種構成が激変する。

今後の課題を２つ提示して結びとする。まず尾張地域周辺、とくに縄文晩期から弥生早期並行の器種構成を遺跡単位（遺構）で検討する。具体的には稲荷山式・桜井式から馬見塚式の時期幅における壺形土器の出現と比率を提示すること。そしてこれらに関連する壺形土器の系統問題、豆谷和之の指摘した「稲荷山型壺」と「馬見塚Ｆ地点型壺」の位置付けである（豆谷 2009 など）。遠賀川系土器のように組成グラフから明確な回答はおそらくない。壺の細部にわたる観察が必要になる。

つぎに深鉢変容壺の問題。佐藤由紀男（佐藤 1999 など）の「天保型変容壺」と称した五貫森式新段階を出現期とする変容壺の成立事情について、近畿の事例から異論が提出されている（宮地 2008・2009）。佐藤が近畿の深鉢変容壺の出現期（口酒井式）として示した兵庫県たつの市（旧新宮町）宮内遺跡例は変容壺ではなく、一時期古い滋賀里Ⅳ式にさかのぼる壺として位置付け、先に課題とした船橋式の深鉢変容壺の系譜に「馬見塚Ｆ地点型壺」を想定する宮地聡一郎の論説である（宮地 2009）。

私はかつて、条痕文系土器の成立期をめぐる壺形土器をとりあげた（永井 2000）。そして深鉢変容壺を３つの系統に整理し、それらのうち、頸が細長くなる長原系を条痕文系の細頸壺につながる系譜と指摘したことがある。名称の問題、系統区分の括り方など批判的意見も多かった。細頸壺の淵源は長原系変容壺とし、近畿からの影響をいまでも想定する。

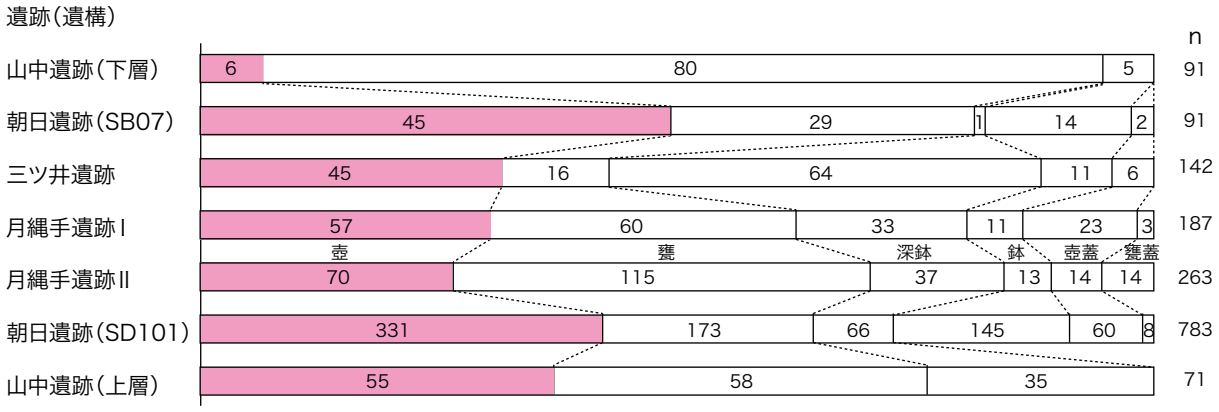
しかしながら、当時は突帯文期以前の深鉢変容壺について東から西への流れを想定していなかった。豆谷と宮地の壺への取り組みについて、稲荷山式を中心とする東光寺遺跡から再検討したい。

謝辞（敬称略・順不同）

愛知県埋蔵文化財センターの既報告資料を実見するにあたり、山中遺跡と三ツ井遺跡については一宮市博物館（土本典生・藤井雅大）、朝日遺跡と月縄手遺跡については愛知県埋蔵文化財調査センター（佐藤公保・鵜飼雅弘）の機関と担当者の方々にお世話になりました。

本稿は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究Ａ「植物・土器・人骨の分析を中心とした日本列島農耕文化複合の形成に関する基礎的研究」（課題番号：25244036、研究代表者：設楽博己）に基づく研究成果の一部である。

表１　尾張平野の弥生前期器種別構成グラフ



参考文献

紅村 弘　1956 「愛知県における前期弥生式土器と終末期縄文式土器との関係」『古代学研究』第 13 号古代學研究會
紅村 弘　1963 『東海の先史遺跡』総括編（東海叢書第 13 巻）名古屋鉄道株式会社
増子康眞　1965 「尾張平野における縄文晩期後半期土器の編年的研究」『古代学研究』第 40 号古代學研究會
紅村 弘ほか　1981 『東海先史文化の諸段階』本文編・補足改訂版
松田 訓ほか　1990 『月縄手遺跡　貴生町遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
服部信博ほか　1992 『山中遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
永井宏幸　1993 「条痕文系土器成立期をめぐる諸問題」『突帯文土器から条痕文土器へ』突帯文土器研究会
樋上 昇ほか　1994 『貴生町遺跡Ⅱ・Ⅲ　月縄手遺跡Ⅱ』（財）愛知県埋蔵文化財センター
田中伸明ほか　1999 『三ツ井遺跡』（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
永井宏幸　1996 「変容・変換する土器～突帯紋から遠賀川へ、遠賀川から条痕文へ～」
『弥生土器を語る会 20 回到達記念論文集』弥生土器を語る会
佐藤由紀男　1999 『縄文弥生移行期の土器と石器』雄山閣出版
永井宏幸　2000 「突帯紋系土器から条痕紋系土器へ」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
宮腰健司ほか　2000 『朝日遺跡Ⅵ』（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
永井宏幸　2008 「東海地方の様相」『古代文化』第 60 巻第 3 号　（財）古代學協會
宮地聡一郎　2009 「突帯文土器の成立と展開及び地域性の構造的理解にむけて」『南山大学人類学博物館
オープンリサーチセンター 2008 年度年次報告書　付編　研究会・シンポジウム資料』南山大学人類学博物館
増子康眞　2009 「愛知県の晩期後半土器編年の展望」『南山大学人類学博物館
オープンリサーチセンター 2008 年度年次報告書　付編　研究会・シンポジウム資料』南山大学人類学博物館
豆谷和之　2009 「馬見塚Ｆ地点型壺形土器の再考」『南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター
2008 年度年次報告書　付編　研究会・シンポジウム資料』南山大学人類学博物館
永井宏幸　2010 「金剛坂式土器の系譜～紅村弘の学説を振り返る～」『研究紀要』第 11 号
（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
山田 猛　2010 『伊勢の突帯文土器』青山文芸社
永井宏幸　2011 「高蔵遺跡出土の弥生前期土器をめぐる諸問題」『南山大学人類学博物館所蔵考古資料の研究
高蔵遺跡の研究』南山大学人類学博物館
一宮市博物館編　2013 『縄文から弥生へ～馬見塚遺跡の時代』一宮市博物館
考古学フォーラム編集部　2013 『論集　馬見塚』考古学フォーラム
紅村 弘　2014 「愛知県弥生式成立の四過程–前期弥生五分類の再吟味–」『伊勢灣考古』23 知多古文化研究会
中山誠二・原田幹・永井宏幸　2015 「朝日遺跡における弥生時代初期の植物圧痕分析」『研究紀要』第 16 号
（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
中村友博　2015 「紅村弘氏の水神平式鉢２型説批判」『山口考古』第 35 号山口考古学会